

トン、トン、トン、トン、こんばんは 富安陽子

山のふもとに、梅ノ木寺という小さなお寺がありました。ある春の夜のことです。和尚さんが小僧さんにこんな話をしてくれました。それは、その日と同じ、ある春のおぼろ月の夜のできごとでした。

トン、トン、トン、「こんばんは」

だれかがお寺の戸を、たたいています。

「こんな夜中に、だれかいな？」と、ふしぎに思った和尚さんが小窓からのぞいてみると、まあ、びっくり！

一匹きの狐が後ろ脚で立って、玄関に背中を向け、太いしつぽで、トン、トン、トンと戸をたたいているではありませんか。

「こりや、驚いた。狐がしつぽで戸をたたいてるがな」

和尚さんはびっくりしましたが、狐が何度も戸をたたくのでしかたなく玄関の戸を開けてやりました。すると狐は、和尚さんの方にクルリと向き直り、後ろ脚で立ったままペコリと頭を下げました。そして言ったのです。

「和尚さん、こんばんは。こちらのお寺の合格祈願のお守りは、たいそうこりやくがあると聞きます。一ついただけませんか」

「ほう！」と、和尚さんは目を丸くしました。

「けど、合格祈願のお守りなんか、狐がもらってどないしますねん」

「実は……」と、狐は話し出しました。

「うちの子が今年、伏見の化け学校を受験いたします。化け術を学びたい全国の狐が集まってくる学校です。狐の学校は、西の伏見と東の王子の二校だけ。そやから競争率も高うて、今年はなんと三十倍とか……。だから、合格祈願のお守りをいただきたくて、お願いにあげりました」

「ほほう！」

ますます驚く和尚さんの前に狐は、竹で編んだ筒をそつとさし出しました。

「これは、天然うなぎでございます。私が、うなぎ筒をしにかけて取りました。お守りのお礼にどうぞお受けとりください」

見れば、竹筒の中にはみごとなうなぎが一匹き入っています。

「これは、おおきに、ありがとう」

和尚さんはお礼を言うのと、合格祈願のお守りを一つ、お母さん狐に持たせてやったのです。お母さん狐は何度も何度も頭を下げて、うれしそうに山に帰って行きました。「今でも春になると、あの狐のことを思い出すのや。狐



の子どもは、無事、伏見の化け学校に合格できたやろか……つてなあ」

和尚さんがそう言うつて、おぼろ月を見上げるつと、話を聞いていた小僧さんが「こりやくつて言いました。」

「へえ、無事合格して、立派な化け狐になりましたで。和尚様、私とその狐ですわん。ほら、じょうずに化けてますやろ？ これ

も、あのお守りのおかげです」

「ほう！ ほう！ ほう！ ほんまかいな！ そうかいな！」

和尚さんは目をまん丸にして、狐の化けた小僧さんを見つめました。おぼろ月の春の夜のできごとです。 (おしまい)